

ある音楽家の軌跡を展示する

「音楽家・松平頼則とその時代——時代を切りひらいた巨匠の軌跡」

茨城県立歴史館 2023年10月28日-12月17日

河西秀哉



図1 展示ポスター

世界的に活躍した現代作曲家・松平頼則(1907-2001)に関する企画展示が開催されると聞き、茨城県の水戸市にある茨城県立歴史館を訪れた。松平頼則は、国際現代音楽協会(ISCM)主催の世界音楽祭に13回も入選、アジア人として初めてその音楽祭の審査員にも選ばれた著名な現代の作曲家である。東南北部地方の民謡を素材とした新古典主義的な作風から出発し、ドビッシェやラヴェルなどのフランス近代音楽にも影響を受けつつ、雅楽などの日本の伝統音楽との出会いを経て、それらとヨーロッパの前衛音楽を結びつけた独自の境地に至った松平の作風は、国際的に高い評価を受けた。世界的な指揮者であったヘルベルト・フォン・カラヤンが生涯で指揮したただ一人の日本人作曲家が松平であったことから、彼の作品が世界的に認められていたことを証明している(演奏したのは《盤渉調越天楽によるピアノとオーケストラのための主題と変奏》1951年作曲)。

しかし、現代音楽は難しい。いや、理解するのが困難と思われると言う方が正確だろうか。その現代音楽を代表する作曲家の松平頼則に関する展示をどのように行うのだろうか。そして、音楽をどう展示していくのか。そうした興味関心から展示を見学した。

ところで、なぜこの世界的な作曲家の展示が茨城県立歴史館で開催されたのだろうか。それは、彼の出自と関係している。松平という名字からもわかるように、松平頼則は近世の将軍家であった徳川氏の遠縁にあたる。正確には、常陸府中(石岡)藩主家の子爵松平家の出身である。常陸府中藩は常陸国府中(現在の茨城県石岡市)と陸奥国長沼(現在の福島県須賀川市)に陣屋を置き、水戸徳川家の一族(連枝)である府中松平家によって治められた

約2万石の藩であった。頼則はその府中松平家第11代当主であった頼孝の長男として生まれた。このように彼は、現在の茨城県の一部地域を元々治めていた家の出身だった。茨城県立歴史館では2019年より外部研究者の協力を得て、松平家に残された頼則関係資料の整理・調査を進めてきたという。この展示は、その成果の一部である。

この展示では、次の4つの楽章と3つのトピックから構成され、前期と後期で一部の入れ替えがあったものの、100点強の資料が展示された。

- | | |
|-------|--------------------|
| 第1楽章 | 府中松平家に生まれて |
| 第2楽章 | 音楽家・松平頼則の誕生 |
| トピック1 | 日本のパイオニアたち |
| 第3楽章 | 松平頼則、世界へ |
| トピック2 | ISCM世界音楽祭、入選13回の軌跡 |
| トピック3 | 世界の音楽家たちとの交流 |
| 第4楽章 | マエストロ、終わりなき道 |

第1楽章では、頼則の実家である府中松平家について展示されている。実は、府中松平家は頼則の父である頼孝も、ある分野では大変著名な人物である。頼孝は宮内省の主猟官を勤めた人物であったが、幼い頃から動物を好んでいた彼が魅了されたのは、大空を飛ぶ美しい鳥たちであった。頼孝は宮内省に在勤中から鳥の研究に没頭し、聴講生として東京帝国大学理科大学動物学科で学び、1912年には同学科の飯島魁東京帝国大学教授らとともに日本鳥学会を設立している。その後、宮内省を退官し、東京小石川の自邸内に標本館を建設、本格的に標本収集と日本初の鳥類大図鑑の制作に取り組んだ。しかし、それに資金を途方もなく注ぎ込んだこと、自らの投資の失敗や身内同様の知人の裏切りも重なって、頼孝は破産同然の状況を迎えてしまう。そして彼が有していた貴重なコレクションは、鷹司信輔・山階芳麿・蜂須賀正ら当時の著名かつ裕福な鳥類学者たちが分割して買い取った。このうち、山階に渡ったコレクションが今日まで残り、現在は

山階鳥類研究所となって、日本の鳥類研究をリードする役割を担っている。つまり、「斜陽華族」のはしりとも言える頼孝のコレクションが、今そこに生きているのである。

第1楽章では、その頼孝を中心とした府中松平家の状況が資料によって克明に提示される。もちろん、水戸徳川家の一族(連枝)であるからこそ、茨城県立の歴史館では府中松平家についての展示が最初に来ているということもあろう。しかし、天皇を支える華族出身でありながら鳥類に魅了された頼孝の様子を展示で見ると、音楽という芸術に突き進んでいく頼則も、父親の生き方どこか通底しているものがあるように感じる。さらに、頼則は学習院初等科からそのまま学習院に進学せず、父親の希望で私立暁星中学校へ入学しているが、なぜ華族の進学ルートとも言える学習院にそのまま進学しなかったのが、ここでわかる。頼則の初等科時代は頼孝が鳥類研究に没頭し、修了時にはすでに家政が傾きかけていた。頼則が華族として「普通」の道に進まず、その後作曲家になるのは、こうした家庭環境があったことからだと提示する展示構成になっているのである。

そして第2楽章では、頼則が音楽家となっていく姿が展示されている。ここでは、2つのポイントをあげておきたい。第一に、頼則が使用した自動演奏ピアノの展示である。一見すると、普通のアップライト型のピアノである。単に頼則が使っていたから展示したのかと思いきや、そうではない。よく見ると、ピアノには各所に無数の傷が見られる。これは作曲に行き詰まった際、頼則自身がつけたものという。このインパクトは大きい。このピアノの傷を見ると、国際的に高い評価を受けていた頼則も、作曲に思

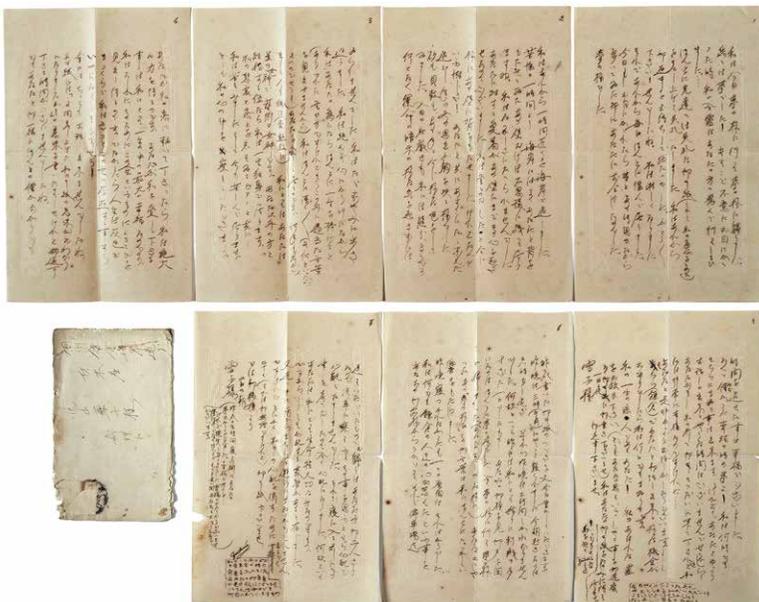


図3 1926年11月2日付片山雪への手紙(個人蔵(茨城県立歴史館保管))

第二に、後に妻となる片山雪に宛てた手紙が3通展示されている。いずれも長文の手紙である。二人は双方の両親の反対もあり、直接会うことを禁じられた。そのため、手紙を通じてそれぞれの想いを伝え合った。展示されている熱烈とも言えるような頼則のラブレターの文面を読むと、少し赤面してしまう部分もあったが、彼の真摯な性格がよくわかる。そして、それが松平家に残っているということは、雪が結婚後もそれを終生大切に保管していたからであろう。それだけ、二人は思い合っていた。さらに雪が和歌で自身の気持ちを伝え、頼則が曲を付けて返したこともあったようで、その《雨たりの pour soprano et piano》という曲の直筆譜も展示されている。ここからは、頼則が音楽家となっていく過程には、この雪との出会いが重要であったことをうかがわせる。一見すると作曲家としての頼則のあゆみには関係のなさそうな結婚前の雪との手紙が、実は彼が作曲家となる階梯にとって重要だということを示す展示であった。



図2 自動演奏ピアノ 松平頼則使用(個人蔵)

い悩み苦しむ姿があったことがうかがえる。そして、音楽に真摯に対峙していた彼の様子も見とれるのである。彼の等身大とも言えるような姿を示す展示と言えよう。

続いて第3楽章では、アジア・太平洋戦争後、作曲家として国際的に活躍していく頼則の姿が描かれる。ここでは頼則の直筆譜や手稿譜が数多く展示されている(第2楽章にもあり)。これを見ると、五線譜に書かれた音符たちが丁寧な筆致で記されていることに気がつく。さらに、修正を繰り返した跡も見え、頼則がやはり真摯に音楽に向き合い、作曲をしていた姿を私たちは感じ取ることができる。



図4 《盤渉調越天楽によるピアノとオーケストラのための主題と変奏》より第1変奏直筆譜
(個人蔵(茨城県立歴史館保管))

ところで、こうした音楽について展示で説明するとき、どうしても専門的な用語や言い回しになる可能性がある。それゆえに専門外の観覧者には難解に感じてしまうこともあるだろう。しかし、本展示のキャプションは音楽的な説明のわかりやすさは特筆すべきものであった。もちろん、音楽的な予備知識が何もないでは理解はしにくいかもしれない。しかし、ある程度知っていればわかる範囲で、頼則の音楽について説明しようと試みている。おそらく、音楽学の成果と歴史学・博物館学の展示論を協同させて、キャプションを作成したのではないかと推察される。本展示では、こうした工夫が凝らされている点も興味深かった。

なお、第3楽章では、初めてパリを訪れた頼則から雪に宛てられた4通のエアメールも展示されている。これらの手紙もやはりいずれも長文で、詳細にパリでの出来事や自身の思いが記されており、それによってフランスの著名な音楽家たちとの交流を深めていった頼則の様子がわかる。手紙という資料の重要性を示す展示でもあろう。

最後の第4楽章では、世界音楽祭のポスターやプログラムなどが展示され、世界で活躍し評価される頼則の姿が提示される。

ここまで展示を見てきて、頼則が作曲した音自体が展示されていないことに気がついた。彼の作曲家としての足跡を見てきたので、せっくなので頼則が作曲した音楽を聴いてみたい。実は頼則の作曲した音楽はその数に比して、CDなどで発売されて自由に聴ける曲は多くは

ない。そう感じたところ、最後にパソコンがあり、6曲ほど頼則の作曲した音楽の録音データが用意されていた。しかもそれは、日本では演奏されておらず一般に発売されていないものと思われる。その点で大変貴重であり、音楽は著作権の問題もあるゆえ、その点からも展示は大変だったと推察される。ヘッドホンをつけて、そのなかからある曲を選択する。すると、フランス音楽と雅楽などを融合させて独自の世界を切り拓いた頼則の音楽を視聴することができた。

最初は、この音楽を展示スペース全体に流した方が、観覧者全体にそ

の印象を与えられ効果的ではないかとも考えた。しかし何の予備知識もなく一聴すると、難解とも言えるようなこの音楽を聴きながら展示を見ることは、困難なようにも思われる。むしろ、展示を見、頼則について知ったところでこの音楽を聴くことで、その意味が十分には言えないまでも理解できるような感じを受けた。この点でも、音楽をいかに展示するのかという工夫が本展示からは見えてきた。

以上のように、本展示は松平家に残された頼則関係資料の整理・調査の成果を踏まえ、彼の作曲家としての軌跡を描くものであった。そうした研究成果が展示という形で、世間にひらかれる。こうした歴史実践のあり方を知る展示ともなった。そして、音楽を展示するとはどういうことなのかを示したのではないだろうか。今後、各地でこのような展示が開催されることを期待したい。

参考：『《令和5年度 企画展3》音楽家・松平頼則とその時代—時代を切りひらいた巨匠の軌跡—』パンフレット(茨城県立歴史館、2023年)

謝辞：茨城県立歴史館史料学芸部学芸課首席研究員の石井裕氏には写真の提供などで特にお世話になった。お礼申し上げます。